

これまでに参加したシンポジウムの中で「中世英文学におけるジェンダー」(第17回全国大会)は特に印象に残っている。日本中世英語英文学会において現代批評理論に立脚した研究テーマがシンポジウムのタイトルになったまれなケースであった。そのこともあってか、フロアと講師との間で熱気を帯びた議論が交わされ、その光景は今思い返しても興奮を覚えるほどである。筆者がコメンテータとしてその場に立ち合うことができたことは大変に幸運であったし、そのときの経験から考えさせられることも多かった。

司会・講師の濱口恵子氏は『修道士の話』を取り上げ、Zenobiaによるジェンダーの越境を語る修道士について、そこに見られるキリスト教教義とオリエンタリズムを分析して見せた。野路薫氏はバースの女房に内在するフェミニズムと反フェミニズムを論じ、海老久人氏はチョーサーのレイプ事件と『バースの女房の話』を結びつけて、チョーサーがなぜレイプに始まるその物語をバースの女房に語らせたのかを問うた。春田節子氏は「女神 Guenevere vs. Arthur 軍団」と題して、マロリーの作品に女性原理と男性原理との対立を読む巧みな作品分析を披露した。これら各講師の発表が多くの示唆に富む啓発的なものであったことは言うまでもないが、その後の会場での議論の盛り上がり、自由闊達な意見交換が実現した理由としてジェンダーという切り口のもつ可能性ということがあったように思う。

それが目新しかったというわけではない。ジェンダーは文学批評の場では20年も前から論じられていることで、中世分野でも個人による研究発表では扱われてきたテーマである。だからこそ、男性を含めた研究者に広く認知され、受け入れられてきた。そして、今やジェンダーはフェミニズム批評だけの問題ではなく、セクシュアリティ、ゲイ/レズビアン批評、クイア理論、オリエンタリズム、ポストコロニアリズムとの関わりから、さらに研究領域は広がっている。その方向性がシンポジウムの場で提示されたこと自体に意味があったのではないか。日本中世英語英文学会ではこのような批評理論による研究はまだ多くはない。しかし、理論的立場、問題意識を共有することによって得られるものは少なくないはずである。また、21世紀を生きる我々が抱える問題と直接結びつく問題がそこに在るという認識に立って中世文学を論ずることこそ、いま我々が中世と向き合う上で重要であろう。

さて、このシンポジウムでは聴衆から多くの意見が出されたが、時間的制限のため議論が途中で終わってしまったのは残念であった。次に会えるのは1年後の大会ということになってしまい、講師の所属校が関東、関西に別れているため、おそらくこの議論を講師間で継続することも難しかったであろうと想像される。しかし、その議論をもっと続けたい、インターネットを利用して何かできないだろうか、という提案がそのときの聴衆の中から出されたと記憶する。最近学会のホームページが開設され、インターネットによる情報伝達も今後増えていくことが期待される。まだ自分のホームページも作っ

ていない者が提案するのをもためられることではあるが、e-symposiumのようなウェブ上の意見交換の場が可能になれば我々の研究環境も向上するのではないかという気がする。また、研究に関する報告、疑問を書き込むことができれば、そして、どなたか詳しい方がコメントやご回答をくださったら、これも若手ばかりでなくすべての研究者にとって有益なこととなるのではないか。大学における研究環境はどこでも厳しくなっているのが現状であろう。学会や研究会に常に出席できるとは限らない。だから余計に、e-環境の進展が望まれる。